

文系とお仕事

「理科の指導ができる先生になってほしい！」という、小学校の先生方への期待がある。というか、理科に「関心」がある先生になってほしいといった方がいいかもしれない。あえて「関心」とした。

興味があったに越したことはないが、個人の好き嫌い、得意不得意もあるので、ワガママは言わないでおきたい。小学生の教育の一環として、自然を学ぶこと、自然とふれあうことに関心があってほしいことだ。季節感、草花、動物、天気、星、・・・。

これらは、芸術、文学、地理、数学などさまざまなものと関わりを持つ。

ぜひ、理科に関心を持ち、指導が発展途上であっても、子供と一緒に自然探究に取り組んでほしい。

さて、小学校の先生方は、大学入学科目の関係で世にいう「文系」出身者が多い。だから理科は得意としない方が存在する。そして理科の授業を担当しないことがある。でも、そんな単純に片付けてもいいのだろうか？

ある航空会社のホームページに、「自社養成パイロット」に関するページがあった。

採用後、地上勤務経験、副操縦士養成課程を経てパイロットになる仕組みのようだ。

そのページには、この過程を経た6名のパイロットが出ていた。6人の出身は、法学部2名、工学部1名、経済学部1名、農学部1名、理工学部1名であった。いわゆる理系3名、文系3名で半々であった。

操縦には、力学、気象、無線、動力、コンピュータなど、理系で学ぶ知識大変多く必要だが、文系出身者がこれらをクリアしてパイロットになっている。職務への興味により、苦にせず学んだのだろうが、もはや「理系だから、文系だから」は全く通用しないかのよう

に思えてしまう。

かつて教えた生徒で、有名なT大学（文I＝法学部）を卒業して鉄道会社へ入社した方がいた。入社後のキャリアには大変興味を持った。駅員としての勤務、車掌としての勤務、そして、普通列車の運転士、特急列車の運転士へとキャリアを積んでいった。私は「こんなことがあるのだなあ」と、今までの固定観念を転換せざるを得なかったと同時に新鮮さを感じた。

皆さんご存じのように、古代では、自然科学は哲学の一つであったようだ。従って、英語圏の学位には、Ph. D. (Doctor of Philosophy) となっている。

学校教育では、～系というニーズはあるが、学問が高度になるとそんな単純なものではなくなってくる。

これから教員を目指す方も現職の方も、文学、芸術、語学、数学、科学と興味を持って学んでほしい。そして、小学校の先生方には、子供たちに理科を教えてあげてほしいものである。